

18 同じ方向を向いて歩こう

病院から特養ホームへの入所が著しく増えてきました。それは病気がかならずしもよくなったからではなく、三カ月過ぎると、病院側の利益が減るからでしょう。

Kさんも病院から四カ月目に任運荘に移された一人です。表情暗く、あまりにも痛々しいので、寮母が思わず手を添え、導こうとすると「ああせちい。なんするんな！」と顔を引きつらせる。体にさわられるのを怖がっているようです。一年過ぎた今でも、トイレか入浴で下着を脱がす時、激しく拒否。「この女ごは、いつもこげんことばかりして、けとばすぞ」。ここに来るまでに深く彼女を傷つけた何かがあったのでしょう。

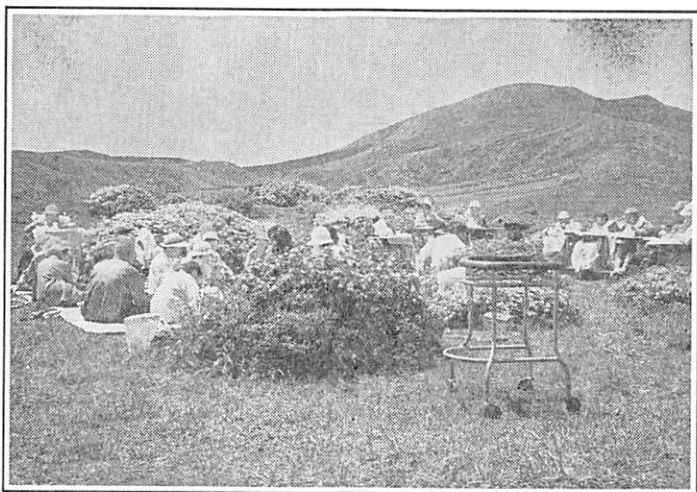
入室早々、戸をしきりに開け閉めするが、つぶやくように「ここはカギかけんのな？」と独り言。やがて自由を得たように激しく動き出し、他の部屋の口

ッカーを開けたり、お菓子をとったり、連日小さな騒動が続きます。

食器に紙をちぎってまぜたり、おしぼりをお汁につけてしゃぶったり、独りにこもつての仕ぐさは、まるで二度童子（わらし）です。奇妙なことに、廊下や各部屋の鉢植えの花を折り歩き、すっかりなくなると、庭の花に移ります。「美しいなあ」とつぶやきつつ。見かねて、思わず寮母が「ああっ！」と制しても、「どげえあるかえ」とすまし顔。やがて落ち着くにつれ、それもやみ、笑顔が見られます。

ここで夫はようやく説明します。「シーツを裂いたり、便をいじる。両手をくぐられ、カギをかけられていた」と。異常行動があるからカギをかけ拘束する。それがまた、さらに異常行為を激化させる。「ここはカギかけんのな？」の問いは、自分を拘束した病院の不条理を厳しく告発しているのです。

ぼけという心の病人には一切逆らわず、ひたすら優しくすべきです。いや、積極的に相手にしてあげることです。でも、任運荘では手が回りかねます。ですから、日中は寮母室でお茶やお菓子をあげて、だれかが仕事をしながら見守



「花がうつくしいのう」——Kさんは阿蘇のミヤマキリシマに声をあげています。精神病院から来た当時は、ドアのところで、「ここは鍵をかけんのかえ？」と不思議がっていました。

ります。特別に待遇されているつもりか、静かに何かをしています。

深夜は寮母が一人ずつの交代ですので、寝ないで徘徊しそうな時は、目が離せませんので寮母が各部屋を回る時は一緒に連れ歩きます。

窓の外は子供公園、子供たちの姿を見て、かわいい、と目を細める。寮母は早速、大きな人形をあげました。ベッドの真

ん中に寝かせ、自分は端に「く」の字に小さく、いつの間にか息子の名を呼んであやしています。「えーらしいなー」と繰り返しています。

それまでは、自分だけに閉じこもっていたのに、車いすに乗せると、喜んで食堂に行き、食事も皆ととり、肥えてきました。抱いている人形をほめられる時の笑顔は美しい。足を前に組んでリラックス。時には人形をそっこのけに、布をいじって手仕事をしている仕草も。他の人たちがおしほりをたたむ作業をしているのを見てのことです。一年たって、まぎれもなく、社会性を取り戻したのです。

ぼけのお世話に何か解決策らしいものを見いだす時、私はきまってアメリカの心理学者・ロジャーズの言葉を思い出します。「精神的な悩みの治療では、その相談者（患者）自身が最上の案内人」と。相談者をぼけに置きかえて、ぼけの本人が世話の仕方を明示している、と言えましょう。

そのためには、相手と向かいあうのではなく、相手と同じ方向を向いて歩く。ぼけの人の心と同じ方向へ歩むことを心がけます。あくまでも人間として尊重

し、こちらから相手の方に身を寄せ、相手のあるがままを受け入れる。それを受容と言います。相手への愛があって出来ることです。

真実、受容のあるところ、道はおのずから開けてきます。
